

房 総 の 古 代

— 意 富 族 と 大 田 族 の 活 動 —

是 澤 恭 三

序 説

本論文は房総の古代と題したが、主旨は房総に於ける古代の開発者たる意富族並に大田族の移住、開拓、発展の模様を探る手段としてそれに關係のあると考えられる資料の蒐集と、それが究明に重点を置き、長らく抱いていた房総の古代文化の性格を暗示する数々の地名や神社に注意を払って考察をすすめ、諸家の示教を仰ぎ度いと思う。

半世紀以前にもなるが、大和平野の日本古代文化の中心地であった飛鳥の地に佇んでい。古事記日本書紀万葉集などによって教えられたこの地方二千年以前の盛事に少しの疑問も抱かず、その繁栄の跡を訪ねて強い感動を続けた事であった。特別そうした機会を得たのも学友の多（おおと訓む）君の家が奈良県磯城郡多村大字多（延喜式の頃は十市郡、現在は桜井市に変わっている）にあって、そこには延喜式々内社の多坐弥志理都比古神社（多神社と略称している）があり、その久しい神主家が村の名と同じ多君の家であった。誘われて冬の休を利用して訪ねた時の事。在学した大学が当時専ら神職を養成する学校とされていた国学院であったから、学生の中にはこの多君の様にその住所を聞いただけでも、その家の由緒の古い事の知れるものが沢山にあった。多君の所は多村大字多で姓が多。倉持君の所は茨城県真壁郡倉持村大字倉持字倉持の倉持君と云った具合である。その土地の名も姓の字も同じで、流石にその土地々々の古い家柄であると知られた。何様多君はその内でも延喜式内社という神社としてはれつきとした社、この家柄は一方宮中の雅楽を職とする家としても何千年の

長さを誇っている。今一つ附加えるならば、この家から古事記の撰者大安万呂が出ていた。本社こまの近くに小林神社という摂社があり、これに安万呂を祀っている。古事記千何百年祭など古事記に關係のある記念事業の折々には、この社の名が世間の耳に新しく甦えるのであった。

多神社の祭神は神八井耳命である。一名を弥志理都比古命と称された。神武天皇の皇子であり、意富臣（多臣とも書く）の祖神である。この神の子孫が古代房総に移住し、房総の古代文化を形成していった。以下専らそれを中心に述べてゆくのであるが、当時はそこまでは考えていなかった。ただ日本の古代史に興味を覚えた筆者は、この社の附近を流れている有名な飛鳥川の堤にも立つた。見はるかすと三輪山が眼近にある。耳成山や香具山も眺められる。遙には畝傍山も指さされる。これらは昔のままであろうが、足下の川は昔から洩瀨ただならぬといわれた川。このあたりの平野を洪水の度毎に我儘に流れ流れて、その都度川筋を替え、洩も何時か瀨と変り、何れがもとの川であったか分らなくなつて仕舞つた事であろう。支流が本流ととって代っているのかも知れない。有為転変を既に何千年の昔から教えているのである。たがその中に古きものが続いて来ているのである。ふと家の系図を思出す。これも飛鳥川と同様、本流が支流が分別のつかぬものがどれ程あるであろうか。

古事記を開いて見ると神々、人々のもとに、それを祖神とする子孫達が数々掲げられているが、中でもこの撰者たる大安万呂の祖先神八井耳の子孫として記してあるものは、氏の数が最も多く掲げられているのに気付かれる。勿論撰者であるから、自らの祖先の事は最も詳しくかつたであろうから、当然そのよう

な結果となつたとも思われるが、あるいはこれも一つには此氏の栄えを記念する意味の記述ではなかつたかとも考えられる。斎部(忌部とも)氏が衰微したのを歎いて、その子孫の広成が家の再興を願って古伝を撰んで著した「古語拾遺」もそうである。延暦年間の家記や、太政官符をもとにして宮内省内膳司に仕えた高橋氏が持伝えたという「高橋氏文」、多少時代も異り体裁も違っているが、これらは何れも衰えた家を興さんために編まれた本である。古事記も元来はそのような家の陳情の意味のものではなかつたかと考えて見たいのである。

さて古事記の中の神八井耳命の栄えた子孫は数十九が挙げられて大和・山城に栄えたものの外九州・四国・中部・関東・東北にまで拡がって、その中に房総の地に国造となつた長狭国造、常陸に常道仲国造があつて、房総方面の古代には大きな関係のある国造であつたと知られる。長狭国造の事は国造を詳しく挙げてある先代旧事本紀中の国造本紀には見えぬのであるが、国造本紀の方には房総の国造を九つも挙げてあつて、当時の房総の治政の状況を想像させるが、九つの国造の中にも長狭国造と同様、神八井耳命の子孫であるものが数々あつて、その繁栄が伺える。国造の置かれる以前にこれらの一族が衆団を率い、房総に移つて来たのであり、この地の開拓に大きな役割を果たしたわけである。その一族らが祖神を祀つて長くその功績を仰ぐばかりでなく、団結の有力な拠り所とした。それが今に残る飯富神社であるとはそれから少し後の事になるが、この飯富神社は君津郡飯富にある。この飯富は飯富が誤られたもの、飯富は意富と同音、この神社が大和の同じく神八井耳命を祀る社であるとは先学も説いている。大和と房総の地と深い関係があるであろうとは、この事だけでも察せられて、深い興味を覚えていた。

更に房総の地に古く望陀という郡名があり、その郡に右の飯富神社がある事から考えて、望陀というのは、この土地に移り住んだ神八井耳命の子孫が、郷里の大和の地の多をなつかしんでこの郡名を生み出したのではないか、望陀は馬来田という以前の郡名を改めた事は明瞭な事であるが、その際は望郷の意味が加つてこの郡名を採用したのだと思う。望陀は望多とも書かれる。これは郷里の多をなめるのであり、望陀は大和でもその名の古い宇陀の地を想出してゐるものと思う。宇陀は今は一小画割を限るようであるが、古くはもつと

広い地域を指していたと思う。この説を提案した時一笑に附せられた記憶がある。それは望陀は馬来田の音通だという答だけであつたが、しかし改名に際して唯無意識の改名ではなかつたであらう。今日のただ言語学上の音通などのみで郡名が改められたと思われぬ。この提案は笑われて引下る程空なものではないように思えて、未だ捨て切れず大方の批判を乞ひたいのである。

次に更に付け加えて記して置こうと思ふのは、意富臣と大田族との問題である。これに就いては多くの筆を費さねばならぬし、今後の研究にも俟たねばならぬものが多い。しかし意富臣の問題を取上げたよい機会である。併せて両者の関係を考えてもらう便宜にも大田のことを紹介して置きたい。

一、房総文化の源流

日本文化の源流、その源が北であるか南であるかという事は常に論ぜられる所である。今そこまでの穿鑿を為ようとするのではないが房総の場合で知られる事は多くは南からの文化に覆われて来ているのではないと見ることが出来る。概括的には、(一)考古的方面と(二)文献的方面とに分けて説明すれば、(一)は何処までも発掘やその出土品に拠つて考へて見ること、推察してゆくことである。(二)はこれを区別して(イ)氏族(ロ)地名(ハ)神社などに注意をして探つてゆくことが便宜であると思う。この(一)と(二)とが合致する所に我々を納得させる事ができるのであるが今ここでは(一)の方は省略して、(二)の方を主として述べて見る事とする。

(一)の氏族の問題は房総の場合一つは海からこの地に来たものと、陸から移つたものとに区別する事が出来、その移住系路を明らかにしている。文献的方面という語を使つたがこの二つの分け方の海の方は古語拾遺が物語っているし、陸の方は古事記の記事で想定できる。

日本列島に沿つて太平洋岸に流れている黒潮は日本の文化を説明する重要な条件だが、この黒潮は遠い南からの文化を伝えたと考えられる大きな証拠となるものである。日本の太平洋沿岸に添つて文化の遺跡をたどつて見ても四国・九州の海岸でも吉野川の川口、紀川の紀川の口、熊野の沿岸、伊勢・尾張・三河・遠江と次には伊豆半島へ、それより房総半島の突端へと黒潮の流に従つて次々と渡つて来た氏族の跡が見付かっている。そこには古代を物語る氏族の祖神を祭る社が今に栄えているのが見付かる。移住の人達の開拓し発展した事が

知られるのである。

その代表としての古語拾遺の語る伝えを記して見る。神武天皇の御時である太王命の子孫の天富命に命じて日鷲命の孫を率いて肥沃の土地を求めて四国の阿波に遣して穀麻の種を殖えさせられた。更に沃地を求めて阿波の齋部(忌部とも書く)等を率いて東の方に向わせ、そこに同じく穀麻を殖えさせた所、非常によい麻が出来たのでその土地を総国と名付け、阿波の忌部の居た所を安房の郡と称し、天富命が祖の太王命を祀ったのが安房神社である。それ故この神社の神戸には齋部氏が居るのであると。即ち安房は四国の阿波の住民達が移って来てここを開拓し発展を見ている事を記している事である。

古語拾遺は知らるる如く齋部の子孫広成が著す所、古来の自家の家業とした神祇祭祀の役が次第に実権を失って来ているのを歎いて古伝を記し、先祖の國家に尽した功績を理解してもらう為に撰んで平城天皇の大同二年(八〇七)に奏上したものである。

一方陸の方からは如何と考えると、九州・四国・中国・近畿と勢力を持つていた意富族が、伊勢・尾張など中部地方を経て相模の三浦半島から一衣帯水の富津に移って来て、それより木更津の東方を中心として発展していったと思われる。古事記に神八井耳命の子孫として

意富臣・小子部連・坂合部連・小君・大分君・阿蘇君・筑紫三家連・雀部臣・雀部造・小長谷造・都那直・伊余国造・科野国造・道興石城国造・常道仲国造・長狭国造・伊勢船木直・尾張舟羽臣・嶋田臣

第十九が見えている。この子孫の繁栄を見ると、中心たる大和の外に、西は九州に肥前・肥後・豊前・豊後・筑前・筑後と大半を占め、四国は伊予に、中部地方には信濃・伊勢・尾張・三河・遠江を経て関東の上総・下総・常陸更に東へ進んで岩城へと延び、驚くばかりの繁昌ぶりを示しているといえる。この氏族の行動の内東方へは大和からそれより尾張三河と出て、一方は信濃に、一方は遠江・伊豆・相模に出て、それより上総に移っていると思われる。相模の三浦半島は夙に中国・朝鮮より渡来の人々によって開発せられてこの名称を得ていたと思われるがその所から上総富津へと渡って来たであろう。古事記に記された子孫達の繁栄の跡を探り連絡をつけて見るとそれが明瞭となる。

三浦半島から上総へ渡る通路は常識であったと思われる。この浦を古く走水

の海と名付けられているが、狭い海峡は干満の際に走水の現象を起し、その様子から名付けられた。それは干満の際の時で、その外の時間は、静かな安易な渡りであった。日本武尊の東征の際もこの所を渡られた。日本書紀に駿河国から相模に進み、また上総に往かんと欲せられ、海を望んで、「これ小き海のみ、立跳にも渡れるであろう」と仰せられて海中に出られた所、暴風忽ち起つて尊の船が漂って渡る事ができない。ここで後の弟橘姫が「今風が起つて浪早く船が沈没しようとしている。これは必ず海神の怒であるう、願わくは、妾身をもって尊の命に代らう」と海に飛入られ、暴風は即ち止んで船が岸に着く事が出来たという。この伝承は有名な事で勿論古事記にも見えている。相模からの最短距離、従つて古くからの交通路となり、昔も今も変りはない。その上陸地点は富津から木更津へかけての海岸、あるいは佐貫、湊町の間などで、これに上陸して市原・君津の両郡へと発展を見たのである。それ故前の黒潮に依つて渡来した方とは別の渡来者が専らこの地方の開発に當つている。その主動隊とも見られるのが意富族、即ち古事記に見える氏族である。この族は上総から下総へ、下総から更に常陸へ進み、又更に陸奥へと進出しているのであつて、種々の発展の跡が地名として、神社として遺されていると思われる。

房総の古代の文化が先ずこれらの氏族の移動開拓によつて西方の文化、殊には大和朝廷の持つていた文化を運んで来たと考えられるのは右のような文献的なものから考えおよばれる事であつて、やがては大和朝廷からの時々の経略や、征伐も行なわれるに至るのである。忌部族や意富族の活動はよほど早くから行われていたのであると考えられる。

日本の国土の経営に當つて、房総方面が早くから注目されて、経津主命・武甕槌命の二勇将を遣して関東を経略せしめられ、両命は各その部下を率いて海路から浪速浦・香取の海に至り、武甕槌命は常陸に上陸し、経津主命は下総に上陸して各その地を中心に四辺を平定せられたというのであるが、この両命の武功はさる事ながら、その子孫の活動は何うであつたかという、若しその土地に勢力を得て居住し栄えられたならば、子孫と見るべき勢力者があつてもよいと思われるが、伝にもそれは見えない。従つて鹿島・香取の両社についてはその創建を神武天皇の頃に置くけれども、神主家の伝承は古いが国造家などの祖とも見えない。この両社の起立については猶考すべきものがあるようであ

る。

房総の地はその後崇神天皇の十年に四道將軍が発遣せられた時大彥命を北陸に、其子の武渟川別命を東方十二道に遣して平定せしめられたが、この十二道について伊勢以下上総・下総・陸奥などをも教えられているから、この地を巡察せられたのであり、安房・朝夷・香取の諸郡に健田郷あるを武渟川別命の子孫たる竹田臣の居住と推定している。続いて武内宿禰が景行天皇の二十五年に東方の国土を巡察している。この時もまた房総の地が巡視の内に在ったであろうと云われ、安房平群王生・上総宗我部・下総雀部は共にその子孫の居住する所と見られている。

次には同じ景行天皇の四十年に日本武尊が東国を征討せられている。前にも引いた通り三浦半島から上総に上陸されている。更に景行天皇は五十三年に東海を経て上総国に到られ、安房国浮島宮に出られた。この時高橋氏の祖磐鹿六雁命が白蛤を料理して天皇に奉りその賞として膳大伴部の称を賜ひ、諸国に大伴部を置かれている。以上は国造の置かれる以前大和朝廷との交渉であるが、これに続いて国造の設置される事となる。

二、国造時代

日本の国内の政治が次第に統一せられてゆく過程の上代の一時期には所謂氏族政治が行なわれた。中央でも勿論であるが、地方の行政では大小の氏族に依存し、これに委任せられて各地方における氏族の長がこれに当たったから国造・伴造・県主・稲置が置かれて夫々の土地を治めていたのである。これは大化改新によって始めて郡県制度が布かれるのであり、国郡の制が確立して氏族に代つて郡司や国司が任命せられた。しかし国司の方は中央から派遣せられたが、郡司の方は多くは地方の国造が任命せられたから、制度は改められても氏族制度の面影がその地方々々に多分に残っていたから、それらの地方の氏族繁栄の様子からも国造時代の勢力状況を察知することが出来るのである。

さて国造についての明瞭な記載は国造本紀に過ぐるものはない。それに記された房総地方の国造は須惠・馬來田・上海上・伊菴・武社・菊麻・阿波・印波・下海上の九が掲げてあつて、須惠から阿波までは志賀高穴穗朝（成務天皇の御世に置かれたとし、印波と下海上の二つを輕嶋豊明朝（応神天皇）の御

世に定められたとしてある。所で国造本紀には収められていないが、長狭国造が安房国に、千葉国造が下総国に置かれた事が、古事記や日本後紀に見えてから、都合房総の地には十一の国造が置かれた事が知られる。而してこれらの国造は何れもその祖先が大和に在つて、それらの子孫がこの地に来てゐる事が知られるのであつて、子孫達は房総の地に移り住んでこの土地を開発し支配していたものと思われ、それが土着の支配権を持つに至り、次第に公認せられるに至つてゐるものと考えられる。国造に就いての根本資料となる国造本紀に見る国造を列記して見る。

①須惠国造 志賀高穴穗朝、茨城国造祖建許侶命兒大布日意弥命定^二賜国造^一

②馬來田国造 志賀願穴穗朝御世、茨城国造祖建許呂命兒深河意弥命定^二賜国造^一

造^一

③上海上国造 志賀高穴穗朝、天穗日命八世孫忍立化多比命定^二賜国造^一

④伊菴国造 志賀高穴穗朝御世、安房国造祖伊許保止命孫伊己侶止直定^二賜国造^一

造^一

⑤武社国造 志賀高穴穗朝、和邇臣祖彥意都命孫彥忍人命定^二賜国造^一

⑥菊麻国造 志賀高穴穗朝御代、无邪志国造祖兄多毛比命兒大鹿国直定^二賜国造^一

造^一

⑦阿波国造 志賀高穴穗朝御世、天穗日命八世孫弥都侶岐命孫大伴直大滝定^二賜国造^一

賜国造^一

⑧印波国造 輕嶋豊明朝御代、神八井耳命八世孫伊都許利命定^二賜国造^一

⑨下海上国造 輕島豊明朝御世、上海上国造祖孫久都伎直定^二賜国造^一

の九である。この志賀高穴穗朝は成務天皇、輕嶋豊明朝は応神天皇の御代である。この外国造本紀に漏れているものに次の二がある。

⑩長狭国造

⑪千葉国造

①須惠国造について、須惠というは安房国の東北に當つていて、のち周准・天羽の二郡となつた所、この名は古くは天富命がこの地に移住して好麻を生じた所より起つたもので、菅麻植の略言であると解せられている。大和方面の須惠を探ると胸部（むねぶ）などもあり、須惠器なども使われていて、忌部族の一族か、あるいはそれに従つてゐた須惠器作り部の意ではないであらうか。次にま

た茨城国造の祖建許侶命兒大布日意弥命とあるが、茨城国造については国造本紀には

軽嶋豊明朝御世、天津彦根命孫筑波刀禰定賜国造^一

とあって、この天津彦根命との関係が見られるが、これはこの命の十四世の孫が建許侶命という事である。而してこの命の子孫に額田部湯坐連・三枝部連・高市県主等があるから、周准郡の額田郷・湯坐郷・市原郡の建市、千葉郡に三枝郷がこれらの子孫の繁栄した所ではなかったかと考えられる。所で大布日意弥命の事はその伝を詳かにしないが、船橋市五日市に意富比神社があつてこれをこの命の祀った社とされているが、これは誤ではないかと考える。後段でその事を述べて見るが、この社は意富族の創始で、即ちその祖神の神八井耳命を祀ったものとする。

②馬来田国造は茨城国造祖建許侶命の兒深河意弥命であるが、須恵国造と同祖である。馬来田というは万葉集に宇麻具多とあり、後に望陀・群蒜の二郡と分れる。この国造は今の根形村大字飯富に居てこの地方を治めていたといわれ、国造廢せられてのち飯富神社の神職となり、子孫がその職を世襲しているといわれている。地理学者として知られた村岡良弼は飯富は長狭国造と同様の意富臣(多臣)の居りし所で、飯富神社はその祖神神八井耳命を祀れるならんと、この事も更に後に述べてみる。

この社の東方鏡峯の山中に二つの古墳があつて、神鏡を納められているので鏡峯と名付けられたと云伝えている。あるいは国造の墓ならんかと。又説く者は継体天皇の妃坂田広媛の所生で馬来田皇女が居られる。これは馬来田の地を賜うて、この地を皇室御領とし給うたので名付けられたと。皇子女などの御名に地名の付くものが多くあるが、それはその土地で誕生されたり、御母のゆかりで名付けられる事が多いから、直ぐ様皇室御領という事にはつながらぬと思ふ。

③上海上国造は天穗日命八世の孫忍立化多比命で、場所は市原郡の一部、のちの海上郡にあたる。

④伊甚国造は伊自牟とも書かれ、これも天穗日命の子建比良鳥命のち伊許侶辺命の孫伊己侶止直であるが、伊許侶辺命は安房国造の祖とあるから阿波(安房)の国造とは同族である。その土地は夷濩(夷隅と改められた)の地を管し

た。この地は安閑天皇の皇后に献して屯倉として皇室御領となつた所であり、今の国府台(国吉町)がその居住と考えられ、大字布施の古墳はこの国造の墓ならんといわれる。

⑤武射国造は無邪とも牟邪と書かれ、孝昭天皇の皇子天押帯日子命のち和邇臣の祖、彦意郡都命の孫彦忍人命が国造となり、のちの武射・山辺の二郡の地を管した。この地方には天押帯日子命の後裔たる小野朝臣・山上朝臣・知多臣・飯高君など、山辺郡や、下総の海上郡には小野郷があり、香取郡には山上郷・千田庄・飯高村などがあつて、この一族の繁栄地と推察せられ、山武郡豊成村の大字武射田が国造の居所と伝えられている。

⑥菊麻国造は無邪志国造の祖兄多毛比命の兒大鹿国直が任じている。上海上国造と同祖である。のちの市原郡を管していた。市原郡能満がその所住であるといわれ、のち上総国府の置かれた所である。また菊間村大字菊間はこの国造と縁故のある所であろう。

⑦阿波国造は、四国の阿波の字と同じであるが、天穗日命八世の孫弥都侶伎命の孫大伴直大滝が補せられたと国造本紀にはあるが、高橋氏文によると大滝は景行天皇の東巡の際に功によって膳大伴部を賜い、安房国の長となし給うた磐鹿六雁命の子孫である。国造本紀が所伝を誤っているものか。阿波国はのち安房郡であるが、ここは前にも述べた四国の阿波から天富命の子孫達に移つて開発した所であるが、国造の置かれた時代にはその子孫の勢力者が無かつたものであろうか。

大化改新が行われ、大宝律令などの制定を見て政治組織が次第に整備されて行き、総の国と呼ばれていた房総の地は新政以後上総・下総の二国に分けられ、養老二年五月には上総国に属していた安房・平群・朝夷・長狭の四郡を割いて安房国が独立しているが、天平十三年十二月には再び上総国に合併された。所がまた天平宝字元年五月には再び安房国を復された。この事は中央統括の理由にも因つたと思われるが、安房と上総とにおける勢力者の相克の結果にもよるものではないか、安房と上総との成立の過程に違ひがあつたのではないか。

⑧印波国造は神八井耳命八世の孫伊都許理命である。印波は延喜式には印幡、和名抄には印幡とある。今の印旛郡である。この命ら神八井耳命の子孫の房総

における繁栄は後に改めて述べて見る。

⑨下海上国造は天穗日命の兄建比良鳥命の後、久都岐直が任ぜられている。出雲国造系図に天穗日命五世の孫に櫛月命というがある。この櫛月を久都岐とよんだのであろう。

以上九が国造本紀に見える所であるが、それに漏れたもの

⑩長狭国造は前にも述べた通り古事記の神八井耳命を祖とするもの、中に長狭国造が見えているので知られるであらう。その管する所は長狭・朝夷の二郡の地である。これは何時補された明らかでないが、印波国造が応神天皇の時に神八井耳命八世の孫伊都許理命を補せられているから、是もその頃の事ではなからうか。

⑪千葉国造も国造本紀には漏れているが、日本後紀の桓武天皇延暦二十四年十月の条に千葉国造大私部直善人に外従五位下を授けられたことが見えて、この国造の存在が知られる。但しこの時代には国造の制は廢されていたがその子孫達は旧勢力を維持し神社の司宰者などとなって国造の称を保持していた。これもその一人であつたらう。しかし千葉国造が何時設置されたかは判明しない。ただ千葉という称のあつたことは国造本紀に応神天皇の御世粟国国造に高皇産靈尊九世孫千波足尼が任ぜられている事が見えるが、この粟国は勿論四国の阿波である。高皇産靈尊の孫天富命が四国阿波国から更に房総の地に来て開拓せられ、安房と名付けられ総と名付けられたりした。その内にある千葉はやがてその子孫の千波足尼の名と現れて、先祖由緒の地四国の阿波の国造になつてゐる。千葉国造の設置当時の名を明らかにしないが、恐らく天富命の子孫忌部氏の族であつたらう。又この千波足尼は千葉での生誕であるか、あるいは生母の郷国が千葉であつたのではなからうか。

以上は大略先学の既に発表せられるものに従つた所が多いが、猶幾程かの私案を加えて見たのである。

三、馬来田と望陀

国造の条でも述べたが、馬来田国造の管した土地は後に望陀の郡と改まるが、望陀の二字が用いられた事について単なる普通によつてこの文字が撰ばれたのではないという事であつて、この文字を撰んだ人々はその祖先意富氏の郷

国をなつかしむ思であつたのを示しているのである。この郡は専ら意富族が集団渡来して開發した場所たる事を忘れずこの字を撰んだと見られる。音韻の側に立つ代表本居宣長は古事記伝にこれを説明して

馬来田国造和名抄に上総国望多末宇郡とありて万葉十四丁上総国歌に宇麻具多能禰呂とよめる地なり末宇多とは後に書紀廿八に大伴ノ連馬来田といふ人名を廿九卷には望多と作りかゝれはもとは望多と唱るを

と見えているが、この馬来田が望陀と改められた事について「地名字音転用例」は

ウノ韻ヲカノ行ノ音ニ転シテ用ヒタル例

として

うまくだ 望多上総末宇郡太 望ハマウノ音ナルヲウノ韻ヲ転ジテマダニ用ヒタリケリウヲ省ク例ハ希也

事記ニ馬来田、万葉集ニ宇麻具多トアリ

と望陀をウマクダとよむ事について、音韻の上では甚だ希れな例として挙げてある。望陀を馬来田と訓むのではなくて、馬来田と書いて宇麻具多とよみ、その音から望多、あるいは望陀と二字の郡名を作つたのである。

国名・郡名を二字の好字に改めさせられたのは、元明天皇和銅六年に畿内七道諸国に令して郡郷の名に好字を用いさせられた。一字名の国郡も多かつたが、泉国を和泉とし、紀国を紀伊とし、総の国は安房・上総・下総となつた。馬来田を望陀と改められるについては、この地方が大和から移住して来た人々の勢力のあつた頃であり、馬来田は望多、あるいは望陀と改めたのである。多はいうまでもなく意富である。陀は即ち宇陀である。而して大和とは最も縁が深いのである。一方馬来田の地名は今も村名として残つて居り、望陀の方も上望陀・下望陀ともに根形村に残つてゐるし、そこには飯富という村もある。前にも記したこの飯富は飯富の誤か、あるいは誤り易い為に改められたかである。この事は常陸国東茨城郡にある飯富村の場合も同様であらう。三河国に宝飯郡というがある。これも宝飯を本体としたのだが、飯の字はいつか飯の字に改められてもとの字が忘れられた。

飯富が飯富であつたことはそこに古い神社があつて、神社の名は今も飯富を守つてゐる。これは神八井耳命を祭つた多神社で、次に改めて述べて見よう。

四、意富族と神社

これも国造の条で提題して置いた事だが、飢富神社・意富比神社・大井神社とこの三つの神社が共に意富氏の祖神を祀つてあることを改めて述べて見る。君津郡根形村飯富に在る延喜式内社の飢富神社の祭神は神八井耳命である。然るに後世社伝で倉稻魂命といつてゐる。内務省蔵版の「特選神名牒」に上総国五座の内望陀郡一座としてこの神社を掲げ、祭神についての按が加えてある。それには

今按社伝祭神倉稻魂命と云るは飽富の字によりて附会せしものとみゆれば信がたし故考ふるに古事記神八井耳命者意富臣常陸仲国造長狭国造等之祖也要とみえ和名抄大和国十市郡飯富郷あり本國望陀郡にも飯富郷あり共に飯を飯とあるは誤りなり神名帳大和国多坐弥志理都比古神社を臨時祭式に太社とも多社とも書き常陸那珂郡飯富村に大井神社ありて仲国造の祖神を祭ると云ひ安房国は古へ上総国にて其夷濊郡に長狭郷あり又其隣郡に望陀にこの社あるはきわめて長狭国造祖神八井耳を祭れるものなること大和常陸の飯富神社に准へて著明なり姑く附して考に備ふ

とあり、その所在を飯富村(君津郡根形村大字飯富)と載せてある。右の文中同神を祀る社として引かれてゐる大和国多坐弥志理都比古神社については、同じ「特選神名牒」の文を引合にしてみると、十市郡十九座大十一座の内の第一に挙げてあつて、二座の祭神ともに名神大社の扱であり、月次・相嘗・新嘗の祭に預つて、祭神は弥志理都比古神と姫神とを列べてある。その説明に

今按社伝祭神第一社は神武天皇第二社は御子神八井耳命第三社は綏靖天皇第四社は姫御神にてますと云りされど其主とある神は神八井耳命即弥志理と姫神の二座にて其余は相殿神とみえたりさて社伝に神八井耳命御弟神淳名川耳尊に吾は兄なれどもつたなくして手研耳命を射ることあたはず汝はすぐれてたけくおほして寇をつみなひ玉へれば天位に臨みて祖業を承継玉ふべし吾は汝尊の輔となりて天神の神わざをつかさどり侍らんと譲らせ玉ひ、御身を退きませる故に一つの御名を弥志理都比古神と申奉ると云るは美に古伝なるべし姑附て考に備ふ

とあり。社格は郷社、その所在を多村(磯城郡多村大字多)と記し、清和天皇

貞観元年正月廿七日に從三位敷八等のこの神に正三位を授けられた事も記してある。即ちこの主祭神は武淳名川命(綏靖天皇)の兄、共に神武天皇の皇子であることを伝えてゐるのである。この事は古事記にも「汝が命上とまして天下治しめせ、僕は汝が命を扶けて忍人(いわいびと)と為りて仕へ奉らむとまをしたまひき」とあり、神社創立の由緒を物語つてゐるのであるが、この神八井耳命の子孫のことは古事記の記事でも知られる如く日本国内に広範圏に見られるのである。古事記の記事は前に引いた。此度は「新撰姓氏録」の記載を掲げて繁榮の様子をみると、先ず左京皇別上に

多朝臣 出自諡神武皇子神八井耳命之後也

とあつて日本紀と合致することを記してある。

小子部宿禰 多朝臣同祖、神八井耳命之後也、大泊瀬幼武(雄略)天皇御

世螺蕨所遣諸國、取飲蚕兒。誤聚小兒貢之、天皇大晒、賜姓小兒部連

これも日本紀と合してゐる。蚕を集めようと命せられたのを誤つて小兒を聚めた人である。左京皇別下には

嶋田臣 多朝臣同祖、神八井耳命之後也、五世孫武惠賀前命孫仲臣子上、稚

足彦天皇成御代、尾張國嶋田上下二県有惡神遣子上平服之、復命之日賜

号嶋田臣也

茨田連 多朝臣同祖、神八井耳命男彦八井耳命之後也、日本紀漏

志紀首 多朝臣同祖、神八井耳命之後也

園部 同氏

火 同氏

山城國皇別には

茨田連 茨田宿禰同祖、彦八井耳命之後也

大和國皇別には

肥直 多朝臣同祖、神八井耳命之後也

豊嶋連 多朝臣同祖、彦八井耳命之後也

これは日本紀に漏れてゐる。次に河内國皇別には

茨田宿禰 多朝臣同祖、彦八井耳命之後也、男野現宿禰、仁德天皇御代、造

茨田堤、日本紀合

志紀果主 多朝臣同祖、神八井耳命之後也

紺口県主 志紀県主同祖、神八井耳命之後也

志紀首 志紀県主同祖、神八井耳命之後也

下家連 彦八井耳命之後也

江首 江人 彦八井耳命七世孫来目津彦「大雨宿禰」命之後

尾張部 彦八井耳命之後也

和泉国別には

雀部臣 多朝臣同祖、神八井耳命之後也

小子部連 同神八井耳命之後也

志紀県主 雀部臣同祖

こうあげてみると、古事記に見える神八井耳命の子孫が如何に繁榮して来ているかが知られる。又これらの子孫で国造時代に何れ程の国造の任命を受けたかを列べて見る。房総地方のものは先に挙げたから省略して置く。

師長国造（成務朝）茨城国造同祖建許呂命兒意富鷲意弥命

仲国造（成務朝）伊予国造同祖建借馬命

道興菊多国造（応神朝）建許呂命兒屋主乃禰

道口岐閉国造（応神朝）建許呂命兒宇佐比乃禰

石背国造（成務朝）建許侶命兒建弥依米命

石城国造（成務朝）建許呂命

科野国造（崇神朝）神八井耳命孫建五百建命

周防国造（応神朝）茨城国造同祖、加米乃意美

伊余国造（成務朝）印幡国造同祖、敷桁波命兒速後上命

火国造（崇神朝）大分国造同祖、志貴多奈彦命兒遲男江命

阿蘇国造（崇神朝）火国造同祖、神八井耳命孫速瓶玉命

の多くに達している。古事記の姓氏録と併せて見てその氏族の勢力が想像せられ、これらによって関東東北方面は何れも建許呂命の兒が多い。当然の事としてその治国には祖神を祀る神社の存在が考えられるが、今延喜式神名帳の上に載せられたものを拾ってみると、(一)須惠国造の条で述べたこの国造が茨城国造と同祖で、建許侶命兒大布日意弥命が任命されたとあるが、一方茨城国造の方には天津彦根命孫筑波刀禰とある。これが同祖の人々ではない様に思える。それは大布日意弥命を祀った社が船橋市五日市にあって、特選神名牒は神明と称

すとし、祭神を天照大御神としていて、説明に

今按社伝祭神かくの如しこの社伝社に船橋六郷の内に夏見村あり神鳳抄に夏

見御厨上分三十段口入三十とあるによりて云るものにて実は意留比神社（留は布

を誤るか）と神明とは別なるべしされど別に老証もあらねは姑く旧説に従ふ

とあり、更に所在の条に

船橋宿（東葛飾郡船橋町大字五日市）

と記してこれにも説明を加えて

今按本社は此船橋にます神明社と誰も思ふことなれ其本社所蔵文書承久元年

の神領寄附状に東隈覆宮塚南隈海云々とある覆宮塚は意富比宮の塚と云こと

なれば本社は神明社の外にあること明けしされど今姑く注進状に因て記せり

猶よく老べし

とあるが、この意富比と名付けられる事、意富と同意であると考えられる。それは次に述べる常陸国那賀郡の大井神社の場合と同様、意富を意富比と延べて

唱えた事から、大布日となり大井の名が生れたもの、その祭神は同じ意富氏の

祖神八井耳命である。若し然らば国造本紀の記載は若干の訂正を必要とする。

(二)仲国造は伊予国造と同祖で建借馬命が国造となつた。伊余国造の条には成務

朝に印幡国造祖敷桁波命兒後上命が国造と定められたとある。この印幡は印波

を指すもので、さすればその条に見える神八井耳命八世孫伊都許利命とは共に

同祖とすべきである。この仲国造の所管は今の那賀郡、そこには延喜式内社として前に掲げた大井神社がある。これも特選神名牒を開いて見ると祭神を建借

間命とあげ、その説明に

今按本社祭神を鹿島神と香取神を祭る由云れど建借間命の音より訛りて鹿島

神とし鹿島神を祭ると云に就て又香取神をも祭りし也さて建借間命は意富臣

の族なること常陸風土記行方に古老日斯貴瑞垣宮大八洲所駁天皇（崇神天

皇）之世為平東夷之荒賊遣借間命即此那珂引率軍士行略凶猾頓宿安婆之島遙海

望東之浦時所見爰疑有人建借間命仰天誓曰若有天人之烟者来覆我上若有荒賊

之烟者去麗海中時烟射海而流之爰自知有凶賊即命徒衆禱食而渡於是有国栖名

曰夜尺斯夜筑斯二人自為首師堀穴造優常所居住覬伺官軍伏衛拒抗建間命縱兵

驅逐賊尺連還閑倭固禁而建間命大起權議校聞敢死之士伏隱山阿造備滅賊之器

敵飭海落連船編棹飛雲蓋張虹旌天之鳥琴天之鳥笛隨波逐潮杵島唱曲七七夜

遊樂歌舞于時賊党聞盛音楽拳房男女悉出來傾浜歛咲建間命令騎士閉堡自後
襲擊囚種厲一時焚滅とある功烈によりて国造に封れしものとみえて国造本
紀に仲国造志賀穴穂朝御世伊予国造同祖建間命定賜国造とある是也さて其出
自は古事記に神八井耳命者意富臣火君大分君阿蘇君伊余国造科野国造石城国
造常道仲国造長狭国造島田臣等を祖也とみえたるが如く神八井耳命の後也
と考証し、またその所在について飯富村并声大（東茨城郡飯富村大字飯富）と
し、これにも説明して

今按茨城県神社録に今茨城郡に大井神社と云ふ処二社あり一は大酒村一は飯
富村なり二社ともに古文書などの徴とすべき物なけれど社地を大井坪と云ひ
村中井のある中に大井中井又大井戸ノ社山大井戸御立山大井戸御手洗大井戸
前など云あるは即古の大井郷の名残なるべく親鸞伝に那賀郡西部大部郷とあ
るは今の飯富村にて飯富は飯富の訛の大部は飯富の訛音なれば祭神の意富臣
の祖なるにも由ありと云る拠ありて聞ゆれだ今之に従ふ

とあつて即ち祭神は建借間命と認め、意富氏をその目目としてゐる。国造本紀
は須恵国造と馬来田国造の条に茨城国造祖と記してあるが右の如き考証が正し
いとなれば、須恵も馬来田も明瞭に神八井耳命の子孫が国造であつた事を証明
している。これもまた国造本紀の誤りではないかという事になる。

五、意富と大田

地名についてその土地の古代の開拓者を知る事は常に行われている。近きこ
ととしては北海道の開拓せられた時、大和十津川郷の住民が移つた所を十津川
と付け、伊達郡から移つた所を伊達と称している類である。古代前住地の名を
負つて移住地に附した例は数々あつて、最もよく知られているのは播磨風土記
に紀州名草郡大田の地に居た一団が摂津三島に移つてそこを大田と名付け、更
に分派して播磨播保に到り、そこをまた大田と名付けた。伊予風土記にも御島
という摂津の御島から移つて来たからであると見えているなど、地名の移動の
例として注意せられてゐる所である。

房総古代において安房の地名の事は最も顕著な例であるが、房総地方に大和
方面の地名と同じものが附されているのは、その一つ一つが右に述べた通りの
理由が発見せられるものでもない。又同じであつてもこれが直ちに移されたも

のいう事は出来ないが、安房や意富の如く考えられる二三の地名を挙げて見
ると、意富族が三浦半島から上総の地に渡つて居住したと推定せられる地方今
日の君津郡富津、木更津附近に目を向けて、富津なども多分に意富の津ではな
かつたかと考えられるが、その傍の飯野村というのも、伊勢に栄えた意富族と
の縁を持つものではないか、伊勢には飯高飯野などの郡があり、飯野郡には意
非多神社があり、特選神名牒の編者は意非の多と解し、多神社にあらざるかと
説いているが恐らく信ずべきであり、意富族の縁の深い地名と考えられる。

地名の問題で近頃考えているのは大田という地名である。これは姓や苗字と
も深い関係のある事で一朝一夕にその結論を出す事は困難な事であるが、日本
の国内の地名で最も多いのは大田であろう。大田は太田とも多田とも邑陀とも
その二、三の異つた文字で書かれているが何れも同意義と解せられる。今日は
国内が交通便利となつて狭くなり、同字の地名は誤られるので区別の為に見
大田、美濃大田、信濃太田、遠江大田、常陸太田、岩城太田など改められてい
る所が多いが、それ程にこの地名は多いのである。吉田東伍博士の地名辞書を
見ても百二三十が収録せられている。又自身も太田姓であつた姓氏家辞典の
著者太田亮君は大田の項でこれ程多い姓も少いと述べている位である。その事
に気付いてこれは何故であろうかと調査の最中なのであるが、意富も大田も無
縁ではない。今は大田氏の祖先になつてゐる大田々根子命と、始めから神武天
皇の皇子神八井耳命の子孫の多氏とは全然関係の無いものとされて来ている
が、その仕事の上から大田々根子命は大和三輪山の大物主命を勅命によつて祭
祀する事になつた家であり、多氏の祖神八井耳命は皇子でありながら御弟に天
皇の位をすすめて身は却いて皇室や国家の平安を祈る神主の仕事とせられ
た。即ち忌人となられて居る。上代以来の祭祀についてはまだまだ研究すべき
点があつて断定を許されないけれども、この神八井耳命の場合と、大田々根子
命との関連は全々無いという事もできないようである。多村の今日の場所は向
いに三輪山を仰がれる場所にある。

今直ぐこの解決を得る事はできないが何等かの関係ありと考えられる事か
ら、意富氏の遺跡と共に探つて見なければならぬのは大田である。そこで房総
地方の大田についてその場所を挙げて見ると

①安房国太田郷、これは和名抄に見える所で、今の豊房村の大字大戸がそれ

であると説かれているが、地名辞書は「地形の大概を以って之を推すに、館山北条及び豊房等汐入川の水系の高地にあたる」と推定し、古代の聚落を想像している。

②上総国長生郡邑陀郷、これも和名抄に長生郡兼陀郷とある。この兼は邑の謬といわれ、今の新治村豊田村にあたると。新治の大字に上太田・下太田があるのはこの遺唱であろう。

③同国君津郡木更津に太田がある。此郡は馬田村のある所、根形村には飯富もあり、上望陀・下望陀もある。更に記して置きたいのは大田にも関係深い勝村が根形村にある。これは秦氏の一族の居住ではないかと考えられる。南総郡郷考によると郷名に「鹿津鹿、今勝村存ス」と見えているが、和名抄にも鹿津津とあるもので他の土地でスグリ、あるいはスグロと訓んでいる。今もこの村にはスグロ姓が多いという事であるが、武田氏の族で真勝というは初め久留里城主で武田遠江守と称したが、のち里見氏に仕えて勝将監と称したのは土地の古名からである。

④下総国海上郡旭町にある太田、和名抄には匝瑳郡大田郷と出ている。成田・太田・十日市場・網戸が合して旭町と改称されたのである。

⑤同国印旛郡根郷村太田、佐倉町に近く鹿島川に沿っている。

以上の大田の外にもまだ数え上げられるものがあるようであるが未だ調査が行届いていない。しかし日本全国の主要な大田を探ってみるとその由緒の古いものが多い。房総においても由緒ある地域にその名の残っている事が認められるのであって、その地の古代の住民の事が考えられるのである。忌部・意富など等しく、あるいはそれらよりもっと古く房総の地に繁栄した氏族ではなかったかと考えられるのである。

ここに大田族の事を出したのははなはだ唐突のようであるけれども、斎部族も意富族も共に古代祭祀に深い関係がある。大田族もまたその関係のあることはこの族から三輪山の祭祀を始めた大田々根子が出ていることでも知られる。大和朝廷の勢力が拡張する以前と考えられる時代から大田族は日本の国内の各地を開拓し発展させていた証がある。そして右に述べて来た多氏とも並々ならぬ繋りを持っていると考えられるのである。近頃この大田族が日本の古代文化の担手の一族であると気付いて、その活動のあとを考えているのである。

半世紀も以前に得た大和での感概が、今この問題と深い関連を持つだろうなどとは考えても見なかった事であるが、次々と資料が集まって来てそれらを検討してゆくと、日本の古代文化史の上に見逃す事のできない問題である事に、自分ながら驚いている。大田族の活動のあとをたどってゆくと次の如き特徴が見出される。

(一)日本国内の地名に大田(太田・多田・邑陀・意富など何れも同類)と名付けられるものの非常に多いこと。しかも日本国土の主要交通路上にあつて今日主要都市となつている所の多いこと

(二)氏族中にも大田を称するものの非常に多いこと

(三)地名は中国や朝鮮から渡来した者の居所と推定されるものが多いこと

(四)特に礪山、金銀銅あるいはマンガンの産地と関係の深い場所の近くに位置していること

これらの項目について少しく詞を加えて見ると

(一)の文字は種々異つていても音も似ており、意味も同じである事が証せられる。中には大と太とは異なるものとして置けるが、特別に取扱っているばかりである。例えば姓では道灌の時は、太田、南畝の時は大田と厳しくいう。地名でも各所が同じではないが、固有名詞になつて動かせないまでの話で、同意同趣である。

地名の場合には主要交通路にあつていっていると置けるが、拾つて見給え、広島市は後に付けられた名で、もとは太田川の川口で、太田といつたらう。岩見大田、播磨の太田は姫路の内に在る。摂津三嶋郡の太田は西国街道、美濃大田、信濃太田、遠江太田、武蔵秩父太田、群馬大田、常陸太田、岩城太田など、挙げれば限はない。今日のように交通が便で鉄道でも出来れば同駅名は困るので区別のため国名を冠するのが多い。

ここで東京都下の大田区について記して置かねばならぬが、これはもと大森区と蒲田区があつたのを合せてこの名を附したのである。このような例は早くから行なわれている事で勿論ここで論ずる以外のものである。大田区誕生の時、大田の意義を知らず、ただ合字して名付けたものであろう。

古代は特別氏を付けて呼ぶ事がなかつたから太田々根子の場合もそのまま名として通用したのであるが、この太田々根子はその出生の地を撰津三嶋の多

田と伝えているが、多田は即ち大田である。大田より出でたる田根子（種子）という意を持つていっているのではないか、この問題はまた別の方に発展してゆくが、大田とは切られぬ縁故を有する。

次に渡来の人、即ち中国や朝鮮から渡来した人達の中に大田を称する人の多いのに注意したい。古代の事であるから遠く隔った人達と系図的な関係があるとは考えられない。後々の大田を称する人は多くその住所を姓としているからである。ただ古い時代の大田を称する人に渡来を伝承するものが多いからである。今も一部落五十戸、百戸などの内に大田姓の家が半数もあるというものがあるが、これらは全部がその子孫というのではなくてその土地の開発者が大田に関係あるのであってその地に住んで大田を称する事になったものが大部分と
いうのであらう。

次には大田と名の付く場所の近くに金銀銅などの産出する鉱区のある事多い事である。今はその名を残しているばかりの所もあるが、何等かの由緒を持つている。岩見大田、摂津多田、美濃大田、武蔵秩父大田、群馬大田、常陸大田、岩城大田、佐渡の大田（現在の多田）その他岩手、秋田の太田は皆鉱区に近い所にある。これも古へからの意味を持つてると思う。

最後にこの調査を思立ってから特に近来の地名の改正の多いのに閉口した。五六年前までの地図には確かに大田の地名を存したと思うあたりに、国土地理院の地図を開いて見ても大田は見付からない。見付からないはずである地名改正によって今日そんな地名が無くなったからである。このような事情が数百年数千年の間に起つていたとしたら、弥々知る手段を失つものがあると思われ
る。この面での博学の士の教示を乞つ事が多いのである。

房総地方の意富族の活動は房総の古代を解明する上には忘れる事のできないもののだが、文献的といつてもそれ程確実な資料が多くあるわけではない。しかも最初に述べたようにこれは考古的な研究と相俟つて考えねばならぬ問題が多いのである。今後その方面との相互扶け合つての研究も行なわねばなら
ないと思つていゝ。（四二・九・一〇）